

(自己紹介・イントロ)

皆さん、こんにちは。

私は、〇〇といいます。

今日は、皆さんに「りんご」についてお話をさせてもらうことになりました。どうぞ、よろしくお願いします。

【青森県の農産物】

今日は、「りんご」についてお話をするのですが、りんごのお話の前に、少し、青森県の農業について話したいと思います。青森県ではいろんな農産物が生産されています。「りんご」はもちろん、お米、野菜。

皆さんも知っているとおりに、りんごの生産量は青森県が日本一です。でも、青森県が日本一の農産物は、他にもあります。知っていますか？「ごぼう」「にんにく」も、実は生産量日本一なんです。「りんご」は主に津軽地域でたくさん生産されています。「ごぼう」「にんにく」は主に、県南地域で生産されています。同じ青森県でも、地域によって、生産される農産物には特徴があります。

【りんごの歴史】

皆さんは、すでに学校の授業でりんごの栽培について勉強したと聞きました。なので、りんご栽培には、たくさんの手間がかかっていることは知っていると思います。

冬の剪定から始まって、授粉、実すぐり、葉つみなど、農家の人は一年中いろんな作業をして、そして、秋に美味しいりんごを収穫しているんですね。そうやって手間暇かけて作られた青森のりんごは、日本だけではなく、外国へ輸出され、色も形も味も良い、と評判になっています。日本では年間約70万トンの生産量があり、青森のりんごはこの約半分を占めています。

どうして、青森県ではこんなにたくさんりんごが生産されているのでしょうか？

(児童に質問)(気候が合っていたなど)

そうですね。青森県の夏は暑いけど、秋は涼しくなる気候がりんごづくりに適していたからというのも大きな理由ですね。

気候以外にも、青森県が日本一になった大きな理由がもう一つあります。それは「人」です。青森県のりんごは、これまでいろいろなピンチにあっているのですが、その時々で、いろんな人が現れて、青森県のりんごづくりを引っ張ってきました。これから、

青森県のりんごづくりの歴史を、「人物」を中心に紹介したいと思います。

(1) 菊池楯衛

普段、みんなが食べているりんご、正式には「西洋りんご」と言います。西洋、とは外国のことです。実は、私たちが食べているこの大きなりんごのご先祖様は、外国からやってきたんです。

いつ頃、この西洋りんごのご先祖様が日本にやってきたかと言うと、明治時代のことです。江戸時代から明治時代が変わったとき、日本の国を豊かにしようと、国では、工業分野でも農業分野でも、外国から様々なものを取り入れていました。

そのとき、外国の美味しい果物を日本でも育てて、農業を発展させよう、と言うことで、外国から、様々な果物の苗木を日本に持ってきました。このときに、西洋りんごの苗木も日本にやってきたのです。そして、苗木は日本全国に配られました。ちょうどこのころ、時代が変わり、江戸時代に武士だった人に仕事が無くなってしまいました。それで、武士だった人に仕事を与えよう、と言うことで、武士だった人を中心に、りんごづくりが始まったのです。

青森県には、明治8年、今から137年前に、3本の苗木が配られ、青森県庁に植えられました。この苗を育てるという大役を担ったのが、「菊池楯衛」という人です。

楯衛ももとは武士でしたが、そのときは県庁職員になっていました。楯衛は、その後も北海道に渡って新しい技術を学んだり、りんご研究グループを作って、栽培技術を広めたりして、青森県がりんご産地になる基礎を作りました。りんご一筋に生き抜いた菊池楯衛は「りんごの開祖」と呼ばれています。

明治10年、弘前市の山野茂樹という人が育てた苗木に、日本で初めて西洋りんごの実がなったそうです。3つ獲れたりんごのうち1つは県庁に届けたそうです。それくらい貴重で、めずらしかったんですね。

もちろん他の県でもりんごは作られ、明治11年頃から日本のあちこちでりんごが実をつけるようになりました。

(ちなみに、そのころ(明治11年)植えられた木がつがる市柏にあります。見たことありますか？いまでも立派に実を付けています。(品種:紅絞、祝))

(2)外崎嘉七

さて、次第に青森県にりんご栽培が広がって、面積も増えてきたのですが、ここで大きな問題が起こります。皆さんも調子が悪くて病気になると思うけど、りんごも病気にかかります。そして、虫が付いて葉っぱや実を食べられることもあります。今の時代だったら、農薬があるので、薬でやっつけられますが、明治時代にはそういった農薬がありませんでした。りんごの木に虫がたくさん付いて、それをやっつける薬もなかったら、皆さんどうしますか？

昔の人は、木の棒で、りんごの枝をたたいて虫を落として、それを集めて焼き殺したそうです。あと、幹に付いた虫を捕るために、木を1本、1本洗ったりもしました。みなさんの回りにもたくさんりんごの木がありますが、それを1本、1本、洗ったり、虫をたたき落としたりするとしたら、大変な手間ですよ。こうやって病害虫が大発生して、こんなに手間がかかるなんて、りんご栽培を続けられない、というわけで、他の県ではだんだんりんご栽培をやめていきました。

ですが、青森県は、やっぱりりんごはすばらしい果物だ、これを頑張って作るんだ、と、我慢強くりんごづくりを続けました。

この時代のりんご栽培で重要な人物に「外崎嘉七」という人がいます。嘉七は、新しいことにチャレンジして、青森のりんごづくりを導いた人です。嘉七がチャレンジして、広めたことには、

- ・袋かけ
- ・新しい農薬の試験
- ・作業のしやすい木の形

ということがあります。

りんごを作るとき、袋をかける、というのは、皆さん、勉強したと思います。袋をかけると、どんないいことがありました？

(長持ちする、色がよくなる)

そうですね。でも、もともと、袋かけは、シンクイムシという病害虫からりんごの実を守るために、嘉七が広めたんです。その後、袋をかけたりんごはきれいな色になることがわかって、現在は、色を良くしたり、長持ちするりんごを作るために袋をかけています。

嘉七がチャレンジしたことの二つ目は、新しい農薬の試験、です。明治の後半、農薬も出始めていたのですが、農家の人は、よくわからないものだ、ということで使おうとはしませんでした。

だけでも、病気は発生して、りんごの木が弱っていきます。これは、早く使い方を研究して、病気を防がなければ、とりんごの研究者は思ったのですが、協力してくれる農家はなかなかいません。困ったなあ、と思っていたところ、よし、自分のりんご畑で農薬の試験をなさい、と言ったのが、外崎嘉七だったのです。嘉七は研究者と協力して試験をして、この農薬は効く、ということを広め、りんごの病気を予防したのです。

三つ目の作業しやすい木の形、ですが、りんごの木、放っておくと8メートルにもなるそうです。それでは手が届かなくて、作業が大変です。作業しやすい木の形ということで、3段にしたり、2段にしたり、いろいろ試されたのですが、嘉七は「一段づくり」という形を編み出しました。木の上をすっぱり切ってしまうこの形に、当時の人は大変びっくりしたそうですが、「一段づくり」は作業もしやすく、日光も良く当たることから、広まり、現在、皆さんがよく見る木の形の原型となっています。

このように、青森県のりんご栽培に大きな役割を果たした嘉七は、なんと長野県まで出かけて、栽培指導をしています。なぜ、長野の味方をするんだ、と言われたそうですが、「長野のよ

うなライバルがいてこそ、青森のりんごは日本一になる」と言ったそうです。非常に人間のスケールが大きい人です。

こうやって、りんごの危機を救う先頭に立った外崎嘉七は「りんごの神様」と呼ばれています。

(3) 澁川傳次郎

青森県のりんごは、明治39年に北海道を抜いて、生産量第1位になりました。それから日本一が続いたのですが、2回ほど、北海道に抜かれて2位になったことがあります。それは、第2次世界大戦終了直後です。

皆さんも、今から70年ほど前に、大きな戦争があったことは知っていると思います。この戦争が、りんごに大きなダメージを与えました。戦争中は、農家の人も戦争に行き、農村に若い人がいなくなりました。そして、りんごを作らないで、主食の米を作りなさい、と国が命じて、自由にりんごを作ることができなくなりました。

また、農業には肥料や農薬が必要ですが、そういった資材も手に入らなくなりました。なので、戦争が終わったとき、りんご畑は、荒れて、たくさんのりんごをとることができなくなっていたの

です。これまで日本一だった青森のりんご畑が、なんてことだ、これではだめだ、もう一度、青森でたくさんりんごを作ろう！ と先頭に立って活動した人がいます。それがこの人「澁川傳次郎」です。

傳次郎は、「青森県りんご協会」というりんご農家の集団を作り、りんごづくりの学校や、若い農家さんの勉強会など、りんごを作る人づくりに力を注ぎました。「りんごづくりは人づくり」という傳次郎の言葉がありますが、こうやってたくさん勉強して、りんご栽培技術を磨いた人たちによって、青森のりんごは見事に復活したのです。

戦争が終わった後の昭和20年、21年は北海道に抜かれましたが、22年には再び日本一になり、それからはずっと青森県はりんご生産量日本一となっています。

現在、青森りんごは、日本全国、北は北海道、南は沖縄でも売られています。そして、海を越えて海外でも売られているのです。品質が良く、甘くて、きれいな青森りんごは外国の人にも好評です。これも、昔の人が、いろいろ努力してくれたことが元になって、現在のりんご農家さんがりんごづくりを頑張っているお

かげです。

さて、青森県を日本一のりんご産地に導いた、代表的な人を3人紹介しましたが、このほかにも青森りんごに重要な役割を果たした人はたくさんいます。小冊子「青森りんご」にも、載っていますので、ぜひ調べてみてください。

【品種】

ここまで、人物について説明しましたが、ちょっと気分を変えて、りんご品種の紹介をしたいと思います。皆さん、りんごの品種、種類は勉強しましたか？どんな品種知っていますか？

そういった品種が、世界には約1万5千種類あります。

りんごは古い歴史を持つ果物で、4千年近く前から作られているそうです。おいしいから、もっと美味しい品種を作ろう、と昔の人がたくさん品種改良した結果、こんなにたくさん品種があるのでしょうね。たくさんあるけど、実際に日本のお店で見る品種はだいたい40種類くらいです。

では、品種の紹介です。

「ふじ」と「サンふじ」、知っていますか。違いは勉強しましたか？袋をかける、かけない、の違いですね。「ふじ」は日本で一

一番たくさん作られている品種です。現在、日本で作られているりんごの半分は「ふじ」なんです。二番目に多いのは「王林」この黄色いりんご。割合は10%くらいです。「ふじ」はたくさん作られる人気の品種ですが、実は、この「ふじ」。デビューしたての頃は、余り人気がありませんでした。色がきれいにつかない、1個、1個味が違う、と農家の人からは不評でした。

ですが、上手に作れば、おいしいりんごなんだ、と「ふじ」のすばらしさを見抜き、「ふじ」を広めようとした人たちがいました。それが「齋藤昌美」という人です。

「ふじ」がデビューした昭和40年頃、日本で一番たくさん作られていた品種は「国光」です。生産量の6割を占めていたそうです。(2番目は紅玉)もともと、明治時代、外国からやってきた品種です。ずっと、たくさん作られていたのですが、だんだん人気なくなっていきました。なぜか。それは強力なライバル、バナナの登場です。バナナって甘いですよ。それに比べると国光は甘みが少ない。だんだん、人は甘い果物を求めるようになって、国光の人気は落ちていきました。そして、みかんもたくさん作られて、りんごも豊作になって、日本に果物が余っている状況

になり、国光の価格はがくっと下がりました。市場に出しても安すぎるから、山や川にりんごを捨てたそうです。もったいない話ですが、それくらい売れなかったんでしょうね。これは、りんご産地青森県にとって大変な話です。

もっともっと、甘くて美味しいりんごを作らなくては、ということで、齋藤昌美は「ふじ」を広めようと、栽培方法を研究しました。おかげで見た目もきれいで、美味しいふじがたくさん収穫できるようになり、どんどん人気が出て、今では生産量の半分を占める品種になったんですね。

現在も、毎年のように新しい品種が生み出されています。もっと美味しいりんごを食べてほしい、作りたいという思いが、品種開発につながっているのですね。

【栄養】

長い歴史のある青森りんごですが、りんごがたくさんある地域に住む皆さんにはぜひ、りんごを食べて欲しいと思います。

りんごには、食物繊維、カリウム、ビタミンCなど体を整える栄養素がたくさん含まれているので、毎日食べて欲しいなと思います。1日、200グラム、だいたい1個を目安に食べるとよいそう

です。お米やお魚、他の食品と組み合わせて、りんごをバランス
良い食生活に役立ててくださいね。

【まとめ】

今までのお話の中で、質問や疑問に思ったことがあったら、
聞いてくださいね。もちろん自分で調べても大丈夫です。それで
もわからないなーということがあったら、後で先生を通して、私た
ちにお手紙で質問してくれればいつでもお答えします。

それでは、これで終わります。ありがとうございました。